

“かわり者”が
世の中を変えていく!

— 有限会社ムラタ —

職 場
ル ポ

EMPLOYEE REPORT

(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



有限会社ムラタ

〒692-0205 島根県安来市伯太町安田中131-8
TEL 0854-37-1743 FAX 0854-37-1748

鳥取県境に近い鳥根県の安来駅から山側に六、七キロ、田園地帯の中に「有限会社ムラタ」がある。従業員二四名、そのうち精神障害者が一三名、身体障害者が一名働いている。職場ルポで精神障害者が取材に応じてくれたことはあつたが、主役として登場するのは今回が初めてである。

精神障害者の雇用は、法定雇用率にもカウントされることになり、先駆的な取り組みが始まっている。だが、現実はまだままだのようだ。知的障害者の雇用も三〇年前はこうではなかったのかという思いを抱きながら、取材を進めた。

精神障害者を雇用 真面目さにびっくり

ムラタを設立したのは取締役の村田昭夫さん、六五歳。村田さんは父親の経営する会社で働いていたとき、ほとんど出たことのない現場で不注意からプレス機で左手指を切断した。その後、地元大手企業の倒産のあおりで、会社が倒産した。これからどうするか。

「長年、安来で暮らしていましたから、町商工会議所などで仕事を紹介してくれました。安全な作業が一番という思いがあり、大手企業の地元工場関係の鉄鋼の金型部品を作る仕事をいただき、一九八五年に安来町で創業しました」



精神障害者の雇用を始めて13年になる村田昭夫社長

その後、一九九一年に会社設立、九五年三月から精神障害者の採用を始めた。「仕事はあるのに、いわゆる三K職場で人が集まらなくて困っていました。私の住んでいた家の隣に、安来第一病院という精神障害者の大きな病院があり、精神障害者が回復した人たちもたくさんいました。働く気持ちがある人は仕事を見に来てください」と話をしたら、十数人が見に来て、そのうちの四人から働かせて欲しいと言われました」

村田さんは、家の周りを散歩している精神障害者回復者たちと、ごく自然に「こんにちは」とあいさつしていた。

「それでも、最初は怖いのではないかと思っていたのですが、働いてもらってまずびっくりしたのは、真面目なことでした」

四人は病院時代からお互いを知っていたため、職場で孤立感をもつことなく、働き心地はよかったのだろう。すぐに仲間が三人増え、工場が手狭になった。そこで障害者作業施設設置等助成金などを受けて、現在地に新築移転することになり、九五年の秋、新しい職場が完成した。

「安全な機械で、ゆったりしたスペースで働きたいと考えました。土地・建物は自己手当てしましたが、機械類は助成していただきました。当時の売り上げは七〇〇万円、倍以上の投資をする人はいないと言われましたが、まだ若かったので走ってきました。実績の少ない会社なのに助成金を出していただいたので、銀行の融資も受けられ、現在地に移転ができました」

経営は山あり谷ありだった。九七年までは順調だったが、九八年に一転、売り上げが激減した状態が四、五年続き、給料は遅配、分割、借入金は減額して返済してきた。幸い、その後に業績は回復した。

「金融機関からは、社会的貢献はしているけれど、法人としては営業利益を上げないといけないと言われて、必死で借入金を返済してきました。ここ四、五年



ムラタで製造される機械部品

でようやく、ふつうの会社になりつつあると思います」

○人、精神障害者は一番多いときは一人働いていた。「勤められない」とすぐ辞めた人は、いままで一人もいない。

雇用に必要な「情報」は教えて欲しい

村田さんは、精神障害について一から勉強した。

「精神障害とはどんな病気なのかから勉強しました。いろいろな症状があり、『がんばれ』と言っている人、いけない人がいます。『がんばれよ』と励ましていたら、ある日『社長、奥のほうから社長を殺せという命令がきました。どうしましょうか』と言われて、びっくりして病院に連れて行くと、統合失調症の症状だと言われました」

ムラタで働く精神障害者は全員、安来第一病院を退院した人たちだ。

「対処の仕方がわからないのが困りました。病名を聞いても、ハローワークでも病院でも、個人情報だからと言いません。本人に聞いてもなかなか言えません。プライバシーが大切なのはわかりますが、せめて担当者にはこういう病気でこういう症状が出るから、こういうことに注意して指導してくださいとか、働く上

での注意点などをもう少し情報開示をして、サポートして欲しいと思います。服薬のことも聞いていければ、お昼の飲み忘れもなくせると思います」



精神障害者ら14名が働く(南)ムラタ

の個人情報がわからなくては、事業所は適切な対応ができないだろう。知的障害者の就労支援のネットワークはできつつあるが、精神障害者にも同様のネットワークが必要だ。

「事業所が責任を持つのは、会社に来てから宿舎に帰るまでです。プライベートにはタッチできません。無断欠勤が一番困るのですが、連絡がないんです。企業、病院、福祉関係、地域の公共サービスなどの連携がうまくいかない、企業はたいへんです」

年一回、地域生活支援センターで、事業主・ハローワーク・病院・本人のミーティングが開かれていたが、自立支援法になつてから、その場もなくなったという。人手が足りなかったとはいえ、それでも雇用を続けてきたのはなぜか。

「社会的入院の人が多く、一〇年二〇年、病院近くの施設に入っている人がいます。一カ月作業所に通っても賃金は数千円。そんな話を聞くと、おかし

いと思うんです。私は最初にお付き合いをしたからかもしれませんが、知的障害の人より精神障害の人のほうが有意義雇用しやすいと思います。養護学校の生

必要な情報を教えてくれなければ雇用はしないという事業所の話は聞く。雇用する側からすれば、それは当然のこと。プライバシーへの配慮は必要だが、障害

徒が職場実習にきたとき、理解してもらうまでたいへんでした。精神障害の人はその点では理解してくれます」

顔色を見て その日の調子を知る

ムラタで初めて精神障害者を雇用してから一〇年を超えた。村田さんは、精神障害者の雇用には、①雇用を担当する会社のキーマンが必要、②同一病院または同一施設からの複数雇用、③粘り強い対応、が不可欠だと考えている。

「働き続けるには、腹八分目、ストレ



「こうして働けて、社長に感謝している」と語る西村弘之さんは、入社して12年になる

ス解消、安全・単純・繰り返し作業だと思えます。つまり、調子のいいときは製品の数が増えすぎて、悪くなると半分というのではなく、いつも腹八分目に見えることが大事です。精神障害の人たちはストレス解消にタバコを吸う人が多く、ここでもそうです。安全・単純・繰り返し作業は単調ですから、現場ではタバコを認めています」

勤務時間は午前八時から午後五時まで。毎日、朝、昼と常に顔色を見て、その日の体調をチェックする。

「一般就労が可能だと言われた人なら、八時間勤務が当たり前だと思っただけです。出勤してくるときの姿、顔色を見れば、その人の調子はわかります。朝、顔を見て声をかけて、その日の調子を見極めて、悪ければ、『あまり無理をするな』と話します。一番新しい人でも二年経つていいますから、この人は季節の変わり目には体調が悪くなるとかもわかります。仲間から『あの人は最近様子がおかしい』と言われることもあります」

二〇〇〇年に自宅に八室の寮をつくり、従業員が入居している。安来第一病院のグループホームに住む人もいます。安来市内在住の人たちは、数カ所の拠点から会社のマイクロバスで送迎する。会社まで約二〇分。勤務途中で帰ろうと思っても、タクシー以外に交通手段はない。給料は、一般、最低賃金、最賃除外と



休憩時間。一服してリラックスする皆さん

分かれているが、一番少ない人でも一〇万円を超す。

「製品のできる数は一緒ですが、判断や指示ができるかどうか違います。障害者年金をもらっていますから、自分の稼ぎで生活して、年金は老後のために貯める人が多いですね」

写真？ OKです

今回の取材を受けるに当たり、村田さんは「写真を撮るがいいか？ 全国版だ



1995年から働く椋木啓二さん。フライス盤を担当している



常時2台の機械を操作する。ときには3台操作することもあるという竹下広義さん

よ」と聞き、「いい」と承諾を得た。代表して、椋木啓二さんと竹下広義さんにお話を聞く。

椋木さんは五八歳。神戸大学を卒業後、会社に五年勤めて発病、故郷の島根に帰って、安来第一病院に入院した。回復後も長年、いわゆる社会的入院をしていて、ムラタで精神障害者の雇用を始めた九五年から働く一番のベテランで、フライス盤の作業をしている。

「最初は立ちっぱなしで、作業は少しいへんでした。会社の人たちにはよくしてもらっています。アパートは快適ですね。趣味は読書とCDを聞くことです」

竹下さんは航空自衛隊に二三年間勤務し、補給を担当していた。発病で故郷の安来に戻り、第一病院に入院した。いまNC旋盤を常時二台、多いときは三台操作する。「障害者を雇用してくれるところはないのではありません。みなさんに



兄弟で働く門脇純さんと門脇建二さん

はよくしてもらっています。最終的には、家に帰れればと思っています」

二人とも温和で物静か。薬で症状をコントロールしている。働く人たちは異口同音に「社長に感謝しています」と言う。最年長者は六六歳になった。

「結果として、そう言ってもらえるのは一番の喜びです。本人から辞めたいと

言わない限りは、辞めてくださいとは言えません。以前、六〇歳になったので定年で辞めなければいけないと話したら、二、三日行方不明になった人がいました。私を信じてきてくれた人たちがいたから、現在の会社があるんです。高齢になり、入退院を繰り返しながら働いている人が五、六人いますが、その人たちが働きたいという間は面倒をみたいと思っています」

工場では、ダイカスト金型の部品やさまざまな機械部品の製造、切削、点検作業などを行っている。

「求人の際には、『ハンディのある人も一緒に働く職場です』と出していますし、面接のときに、『半分は精神障害者が働いています。怖くはありません。あなたが見てわかるかどうかわかりませんが、会話はできますし、仕事もできて、普通です』と説明します」

精神障害者の雇用が 当たり前になる日へ

いまなお、周りの目は厳しく、支援する側の動きはなかなか進まない。

「最初は、発注側に精神障害者が作っても大丈夫か、納品の助手に連れてきて大丈夫かと言われました。知的障害の場合は、生まれたときからの障害ですから、病院、学校、家と周囲とかかわりな



次の「ムラタ」を引き継ぐのは、息子の村田憲昭さん

がら成長してきます。精神障害者はうちで働いている人たちも高学歴の人が多くです。ある時点まで健常者と同じで、ある日突然のことなので、社会が受け入れがたいのではないかと思います。偏見はまだありますね」

村田さんは、聴覚障害者を雇用したときは手話を習った。ヘルパー二級の資格も持っている。この四月に社長を息子の憲昭さんに譲り、顧問に就く予定だ。

「息子は、のめりこむのは嫌だと思っているでしょうね。私には最後まで面倒を見なければという信念があります。安来の町では、『ムラタは助成金をもらって障害者を雇用して、ええ格好している』と言われていました。利用したと思われるくないので、それには雇用継続が一番です。最後まで働く場があるということは、本人たちの生きがいにもなります。その

うち、息子にもよさがわかることを期待しています」

他企業に勤務していた憲昭さんが親元に戻って一〇年になる。

「うまい具合に回っているのだったら、それを継続すればいいと思っています。外から見ているときは、精神障害者に仕事ができるはずはない、たいへんだと思っていました。一緒に働いてみたら、ふつうに仕事ができることがわかりました」

三〇年前、知的障害者が会社で働くという、近隣から反対の声が上がりに、知的障害者が作った製品は大丈夫か、安く雇って儲けている……などの声があった。いま、そういう声は聞こえない。

障害者を取り巻く職場環境はここ三〇年で大きく変わってきたが、精神障害者の雇用はまだこれからという感がする。雇用を進めるには病院、施設、関係機関、地域などの支援態勢の充実が不可欠だと改めて感じた。

「精神障害の人も、やっと障害者として民間会社に雇用してもらええる機会をつくってもらえるようになりましたので、ぜひともいい方向に向かえばと思っています。私は精神障害者を雇用したことを誇りに思って、子どもに継承して、あの世に行きたいですね」

知的障害者の雇用は、事業主の個人的努力で始まった。何事も、少数の「かわ



精神障害者の雇用が当たり前になる日へ「ムラタ」の挑戦は続く



り者」が新たな試みを始め、世の中は変わっていく。取材の日、冬の山陰には珍しく、青空が広がっていた。村田さんが「この空は、未来を象徴しているように」と、私たちを見送ってくれた。夕日に染まる山並みを眺めながら、私たちも同じ思いだった。今回の取材のように、精神障害者が職業人として誌面に登場することが当たり前になる日が近いことを願っている。